

## 二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科

## 修士課程 特別選考入学試験問題 【小論文】 【国語教育専攻】

## 解答上の注意

- 一. 解答用紙の所定欄に、受験番号・氏名・研究指導名・指導教員名を必ず記入すること。
- 二. 無解答の解答用紙でも提出すること。
- 三. 問題用紙は「三枚」（本ページ含む）、解答用紙は「一枚」です。必ず枚数を確認すること。

以上

# 二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科

## 修士課程

## 特別選考入学試験問題

### 「小論文」

### 「国語教育専攻」

問題 次を示すのは、田近洵一『自立と共生』の国語教育』（光文書院、一九九六年八月）の一節である。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

#### 学習の体系化と主体化

国語学習には、いろんな学習の仕方があります。一つは、入門期の指導がその代表的な例であります。すなわち、言語の体系的な指導です。例えば、かな文字の指導、漢字の指導、文法の指導などは、体系的に進めていかななくてはならないでしょう。もちろんこれらは、単元的にできますが、その場合でも体系がおさえられていなければなりませんし、いつも必ず単元的であるとは言えないでしょう。

それから、二つめは、文章の確かで深い読みの指導です。文学教材の細部とプロットのかかなり厳密な読みの学習もあつていいだろうと思います。

表現に関しては、ものやことを確かにとらえて、文や文章の構成を意識し、表現の仕方を考えて文章を書く指導です。現実の事物の認識と、文構造、文章構造、表現技法を意識した作文指導で、例えば、取材メモを作り、構想メモを作り、文章に書いて、今度は、表現を推敲するというようなことをします。

先ほど述べました学習活動の開発、あるいは工夫は、主として、今述べた読みの学習、あるいは作文の学習を効果的なものにするために必要なことです。もう一度言いますと、国語学習のあり方としては、言語そのものの体系的な学習と、文章の読みや、作文や音声言語の精密な学習がありますが、さらにもっと総合的な学習、活動全体を切実な、生活的なものとして組織した学習があります。

私達が、外国語を学習しようとする場合のことを考えてみましょう。単語の知識なり、あるいは、グラマーなりを集中的に身につけていこうとします。言語知識、言語技術そのものの学習をそこでやっているわけですね。しかし、生まれてきた子どもはそういうことをやらないし、また、小学校一年生ぐらいでも、例えば、主語と述語の照応した文を書いてみよう、そういう勉強をしよう、と言ったって、子どもはピンとこないでしょう。三年生の重点目標は、要点の読み取りだからといって、要点というのはこういうもので、要点を読み取るためにはこれとこれとが大事だ、というようなことをやっても、無理でしょう。

もちろん、小学校低学年でも、かな文字などに関して言語知識の体系的な学習をやっています。しかし、文章を読んだり、書いたりするときには、そういう言語知識・言語技術を特に取り出してやるということとはなさらないだろうと思います。それが、授業と学習参考書との違いです。教室では、児童・生徒一人ひとりの発見や感想などを大事にしなから、それを相互に交流し合っていくきます。これは、あらかじめ用意したものだけを体系的に習得させる場合と違って、学習活動を学習者のものとして生活化し、主体化しているわけでありです。その点で、基本的には、単元学習に通じるものだと言ってもいいと思います。

#### アクチュアルな言語行為の設定

人間にとって、最初のことばの教師は母親だと言われます。お母さんが無意識のうちに語りかけることばを子どもは学び取っていくのです。その時学び取るものは、単に、言語知識、言語技術だけではありません。母親と子どもとの間で人間的なコミュニケーション意識、人間関係意識、あるいは、思いやりの意識、というようなものが育ってきます。たくさんさんの言語知識以外に、人と人をつなぐコミュニケーション能力、そして、ことばに対する感覚、あるいは、ことばに対する態度、そういう情意的領域の能力も育っていきます。その点で、言語知識、言語技術だけをとり出して教授するだけでは不十分なことがたくさんあります。先生と児童・生徒のやりとりは、だから大事なんです。あるいは、友達同士のやりとりは、だから大事なんです。

文字や文法など、教えるべき知識内容が体系的に明確になっているものは、その知識の体系に基づく教師の側からの指導でもある程度有効であります。もちろん、それもある程度であって、注入・訓練だけでは、自ら学び取る能力（さらに応用力・適応力）は育ちません。いわんや、ことばとかかわり、ものを認識し、人とのつながりをつくっていく言語能力は、一応の要素に分析・分類していくことはできるにしても、実際には、人間関係や場の意識との関係で働く、生活的・総合的なものなのです。そのような言語能力は、これまで述べてきましたような、アクチュアルな言語行為を通して習得されます。問題は、どうしたら子どもの言語行為をアクチュアルなものにすることができるかということです。

# 二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科

## 修士課程

## 特別選考入学試験問題

### 「小論文」

### 【国語教育専攻】

国語学習を充実したものにするには、学習内容としての知識・技術を明確にするとともに、子どもの聞く・話す・読む・書くの言語行為をできるだけ生き生きとしたものにしなければなりません。そのためには、言語行為を内側から支える知的好奇心とコミュニケーション意識とを刺激して活性化する必要があります。すなわち、「何かを知りたい」「（認識）「何かを伝えたい」（伝達）」という、そういう二つの基本的な欲求を活動のバネにする、それをエネルギーにする活動を設定するのです。

そして、それを、聞く・話す・読む・書く諸領域の能力が、さらには、情意的な領域における態度的なものが相関的・総合的に働くような場にするのです。例えば、文学教材を読むことの中で、ことばにこだわりの、その意味をいろいろと考えたり、それについて友達の話の聞いたり、また自分が感じたことを話したり、自分が思ったことをメモしたり、あるいは、討論したり、繰り返し繰り返し朗読してみたり……そういう問題追求と相互啓発の言語行為が言語学習を成立せしめるのです。

〈行動としてのことばの学習〉を――

もう一度言いますと、諸領域の言語活動の能力と情意的領域の態度とが複雑に関連し合いながら、一つの活動を構成する。そのときに、その活動は、「何かを知りたい」（認識）、「何かを伝えたい」（伝達）の二つの欲求をバネとして進んでいきます。一つの文章の読みでも、また作文でも、言語行為を成立させるバネとして、どのような場合にも、この二つの働きを大事にしなければなりません。単元学習は、さらにそこに成立する活動のリアティ―を重視するところに生まれたものです。すなわち、児童・生徒を、言語活動を必然とするような場に立たせ、その活動を活性化しようとするのが単元学習です。

それは、例えば読みだけを子どもの生活から切り離さず、何かを知ろう、何かをまとめよう、何かをつくろう、何かを伝えようなどの生活的要求のもとに、聞く・話す・読む・書くの言語活動を生活的な必然性を持って、ダイナミックに展開させようとするものです。言語活動を必然とするシチュエーションにおいて、主体の「知る」「伝える」とのかかわりを強め、その活動のアクチュアリティ―を高める――そのことで国語学習を充実させようとするものとして、今日、単元学習が目ざされているのです。単元学習をたんなる学習の形態とすることなく、〈行動としてのことばの学習〉を成立させるという基本をこそ、大事にしていきたいと思えます。

問1 この文章に示されている、田近洵一の「国語学習」についての考えを、わかりやすく要約しなさい。

問2 この文章に示された「活動全体を切実な、生活的なものとして組織した学習」という視点から、今日の国語教育の課題について考えられることを述べなさい。

《注意》解答はすべて別紙の解答用紙に記入しなさい。解答用紙の「問題番号」欄に「問題」と記入した上で、問1・問2とそれぞれ記入してから、続けて解答を記入してください。解答用紙は裏面も使用可です。